

令和元年度第1回1. 5℃を目指す地球温暖化対策推進本部会議 本部長訓示

昨日の諮問文、練りに練っていただきました。京都市の8月の最高気温は42℃を超え、全国での熱中症などによる死者は1万5千人を超える、これは環境省が公表した地球温暖化対策が実を結ばなかった場合の2100年の天気予報です。

今、「気候危機」ともいうべき状況に直面しております。これと戦うこと抜きには、人類は築き上げてきた生活も、文化も、存続させることができない、命に関わるという危機感を持たなければならないと思います。

京都は、千年を超えて都市の機能・文化が遮断されずに継承・発展してきた、レジリエント・シティであり、SDGsを体現してきたまちであります。

その京都で人類初の地球温暖化対策に関する国際的な約束事である「京都議定書」が生まれ、さらに、パリ協定の実行を支える「IPCC京都ガイドライン」が採択されたことには、必然性があると思います。

再びここ京都が世界の地球温暖化対策に大きな役割を果たすべく、京都市の都市経営の根幹に据える地球温暖化対策を再構築し、この気候危機に挑んでいかなければなりません。

そういう思いを込めまして、昨日開催された環境審議会への諮問文に、あえて「長期目標として2050年二酸化炭素排出量正味ゼロを実現するための」という文言を加えております。諮問文については、配布しておりますのでじっくりと読んでもらいたいと思います。

私が会長をさせていただいている指定都市自然エネルギー協議会の昨日の総会におきましても、2050年二酸化炭素排出量正味ゼロについて共有いたしました。

先ほど、各局区からのご発言がありましたが、いずれも大切な視点であり、心強く思います。

つきましては、2050年まで約30年であります。「正味ゼロ」という高い目標に向けて、全庁を挙げて取組を進める必要があります。ここで3点、踏まえていただきたいと思います。

1つ目は「市民が主人公」ということであります。

イノベーションの促進やライフスタイルの転換、担い手の育成など、これまでの延長線上にとどまらない大変革が必要であります。行政がいかに関与を推進しても、市民の皆様様の行動なしには実現はできません。

地球温暖化は京都の危機、地球の危機、人類の危機、毎日毎日の市民の生活の危機であるということ、そして、地球温暖化対策は、将来の京都、日本、世界のためのものであり、自分たちの豊かな生活を継承していくためのものである。そのことを、市民の皆様と意識・行動をしっかりと共有し、取り組んでいく必要があります。

2つ目は職員一人一人が「自分ごと」として考え、取り組むということであり、気候危機は、文化、経済、社会、また命の存続の危機であります。

地球温暖化対策は担当部局だけで取り組むものではありません。分野横断的に取り組む必要があります。そうした意識をもって、2050年二酸化炭素排出量正味ゼロに取り組んでいてもらいたいと思います。

3つ目は「未来に対する責任を果たす」ということでもあります。

私たちが、子や孫たちの世代に、「何故あの時、2℃ではなく1.5℃を目指さなかったのか」「何故あの時、今世紀後半ではなく、2050年を目指す選択をしなかったのか」と嘆かせることがあってはなりません。「未来に対する責任」を果たしていかなければならない。

未来の子どもたちに持続可能で豊かな地球環境をお返しできるかどうか、今その瀬戸際に立っているととっても過言ではないと思います。

そのためには、未来の視点に立って、局の枠組にこだわらず、市役所の限界まで、あらゆることに挑戦する姿勢で臨んでもらいたいと思います。

今回立ち上げる、2050年の市政を担う若手職員によるワーキングチームにつきましては、その先頭に立っていただく方ですので、各局区等から積極的な推薦をお願いします。尖った人の参加を大いに歓迎します。激論を交わしながら取り組んでいてもらいたいと思います。

以上3点、「市民が主人公」、「職員一人一人が自分ごと」、そして「未来に対する責任」、よろしくをお願いします。

「危機に立ち向かう」ということは「暗くなること」ではありません。立ち向かう楽観主義。今、叡智を集めて、市民ぐるみで行動すれば必ず展望は拓けると思います。未来に対して創造的、クリエイティブで明るい夢と希望を持って取り組まなければならないと思います。

様々な地球温暖化対策に取り組んできました。例えばこの20年でごみは半減し、エネルギー消費量は26%削減することができました。深刻な危機感は大変ですが、みんなが夢を持って、楽しみながら取り組んでいく。クリエイティブになる。悲観主義からは何も生まれません。笑顔をもってこの挑戦を進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。